

優秀賞

水の旅―立山から富山湾へ―

富山県

富山大学教育学部附属中学校

二年

奥 望 帆 子

私たちの体の大半は、水でできている。今日、私が飲んだ一杯の水も、もしかすると、かつて立山に降り積もった雪だったのかもしれない。そう考えると、私の体もまた、雄大な山や広い海とつながっているような、温かい気持ちになる。私は、ただ水を使うだけの存在ではなく、この水のリレーをつなぐ走者の一人でありたいと思った。

もし、私が立山の雪解け水の一滴だったとしたら…。

五月の連休が過ぎる頃、富山県の雄大な立山連峰の山頂近くで、静かに物語が始まる。春のやわらかな日差しを受けて生まれた一滴のしずく。それは、富山の豊かな自然を巡る「雪解け水」の旅の始まりだ。生まれたばかりのしずくは、岩肌をすべり、仲間たちと合流しながら、勢いよく斜面を流れ落ちていく。最初にたどり着くのは、山のふもとに広がる深いブナの原生林だ。ここは「緑のダム」とも呼ばれ、水の旅にとって欠かすことのできない場所である。

森の土は、長い年月をかけて積もった落ち葉がふかふかの腐葉土となり、巨大なスポンジのように水を受け止めている。しずくが土の中へゆつくりと染み込むと、土や微生物たちが不純物をそっと取り除いてくれる。さらに、森は大地に眠る豊かなミネラルを、しずくに与えてくれる。静かな土の中で過ごすこの時間は、ただの雪解け水が、命を育む「恵みの水」へと姿を変えるための、大切な時間だ。

やがて森を抜けたしずくは、再び地上に現れ、富山が誇る「急流河川」の流れに身を任せる。常願寺川や黒部川など、富山の川は全国でも有数の速さを持つ。

「富山の川は、川ではない。滝である。」

かつて外国の技師がそう驚いたというほどの激しい流れの中で、水は岩にぶつかり、白い泡を立てながら流れていく。この勢いこそが、二つ目の浄化の仕組みだ。水が空気と激しく触れ合うことで、さらに

澄みきった水へと磨かれていく。速すぎるほどの流れは、水が自らを清め、より強く生きるための鼓動のように感じられる。

扇状地を抜け、里へとたどり着いた水は、人々の暮らしを支える存在となる。田んぼを潤し、黄金色の稲穂を育てる水。蛇口を通って、誰かののどを潤す水。立山の山頂で凍えていた一滴が、こうして人の笑顔を生み出している。その姿に、水の持つ不思議な力を感じずにはいられない。

そして水は、旅の終点である富山湾へと注ぎ込み、豊かな海の生命を育む糧となる。

この水の旅を思い描いたとき、私は大切なことに気づいた。水が旅の途中で少しずつきれいになっていくのは、自然界に「優しさのリレー」があるからだということだ。かつての私は、蛇口をひねれば当たり前のように出てくる透明な水を、何気なく使っていた。しかし、森や川、海が次へ次へと、水をきれいなまま手渡すバトンをつないでくれているからこそ、私たちはこの恵みを受け取ることができるのだ。

さらに、このリレーには私たち人間も参加している。里に降りてきた水を、農家の人たちが大切に守り、汚さないように気を配りながら、再び川へと返していく。古くから水を敬い、自然と共に生きていた人々の知恵と心が、この循環を支えてきた。自然が水を清め、人がそれを慈しみながら次へ渡す。この「命のリレー」こそが、富山の誇る水の姿なのだと、強く感じた。

雪解け水の旅は、これで終わりではない。水は海から蒸発し、雲となり、再び立山に雪を降らせる。次に生まれてくるしずくが「いい旅だった」と言えるように、私はこの豊かな水の物語の守り手として、まずは身近な一滴を大切にしていきたい。